全体ディスカッションを振返って

研修部会長　安間孝明

作業所学会の全体ディスカッションとして就労支援部会、地域生活支援部会、本人部会の３つの分科会としてテーマを深めていただきフロア全体で様々なご意見を頂きました。今まで増田先生におんぶにだっこで全体会の進行もお任せしていましたが、福祉大学の学長の先生にこれ以上負担を掛けることはできないので、私がやらせて頂きました。ですから分科会も全てのパートを回らせて頂きました。

地域支援部会の今年度のテーマは「こんな時代に入所施設を問う」と題して大ベテランの内田さんにレポートしていただきました。「地域で暮らす」という事は非常に重要だと思います。しかし、グループホーム、入所施設の置かれている状況等を私達が知らなすぎて、様々な情報を共有する事が、結果、利用者が安心して生活を送れる事につながる事なのだと改めて気づかされました。そして入所施設の課題と必要性について考えさせられる内容だったと思います。個人的には、緊急対応できる入所の役割を再考する機会にもなりました。

また、就労支援部会に関しては「支援としての活動、多様な立場から働く事の支援を考える」と題し昨年も発表していただいた「こなこな」の堀米さんが登壇してくれました。作業所学会のあり方として継続的な探求と発表は、同一視点からの課題の変遷と、その時にどの様に感じ、考え乗り越えて来たのか？また、その時に残った課題は何だったのか？等の私達が障がいのある方達と試行錯誤してきた事を未来に託す記録という大切な宝物だという意味があると感じました。

本人部会は、「ところで利用者の本音は？」と題してコロナ禍で翻弄されながらも様々活動をしてきた本人たちが①コロナ禍で嫌だったこと②コロナ禍でどんなことに取り組んだのか？③本人の想いという３点を中心にインタビュー動画として深めてもらいました。正直、金子理事が「初めてなので」と言われていたので内心心配していたのですが、案じる必要は全くありませんでした。ベテランの松岡さんの助けもあったと思いますが、素晴らしいアイデアでコロナ禍ならではの工夫をされていました。動画という形で実際の発表を当事者の方にやってもらうのは、本人も緊張するし難しいと思います。しかし、いつもの慣れた空間で慣れたスタッフのインタビューを受け、友達に話すように思いを語ってくれました。これなら本音を聞けると思いました。それぞれの部会が工夫を凝らして取り組んでいる様子が良く出ていました。これぞ作業所学会と思いました。

全体ディスカッションでは、日頃様々な事を考え、悩み、迷っていたであろう会員から様々な発言をいただきました。また、重鎮の斯波さんの経験から来る話は、連合会にいるからこそ聞けると思います。そして顧問の高木さんからも意思決定支援についての新しい気づき等についての発言がありとても意義のあるディスカッションとなりました。そこに鋭い指摘として作業所学会の羅針盤と私が思っている増田先生にお願いして更に深めていけたと実感しました。

学会として歩み出してまだ、数年、されど数年、基調な積み重ねによって互いに学んでいると思わされています。足らない所は多々あるかと思いますが、ご理解とご支援を今後ともよろしくお願い致します。